

たった1回の札幌空襲から戦争を見つめる

6年生 社会科 「戦争と人々の暮らし」
～授業の振り返り～

児童
6年3組 31名

指導者
多田 公洋

成果

教材化について

札幌の平和教育という視点から考えると、戦時中の札幌を教材化している点が大きな成果といえる。一般的には、教科書にあるような広島や長崎の原爆や沖縄戦、東京や横浜の空襲が取り上げられることが多いため、札幌空襲を教材化した点が、札幌市の平和教育という点ではとても意味深い。

本時の中心資料が当時の北海道新聞の記事と全国の主要な地域の空襲被害であるため、比較的容易に資料を手に入れることができ、それで実践できるという点で、札幌の多くの学校で実践できる授業であった。

本時において子供たちの追求の財産となっていたのが、お年寄りへの聞き取り調査であった。歴史を聞き取りによって理解できる点や、生の声を通して実感的に理解することができるという点でとても大きな成果があった。また、聞き取りを通して、戦争体験談が次世代に語り継がれたという点も平和教育という視点では欠かすことのできない成果であるといえる。

教師のかかわりについて

問題作りまでの場面については、非常にスムーズにいった。マスキングをして、子供の問題意識を高めるなど、子供が問題解決に向かうまでの過程がしっかりとできていた

戦時中の子供に自分を投影させて、知と情の揺さぶりの中で疎開を考えた結果、実感を生む学習になることが確認できた。

課題

教材化について

疎開先での暮らしやつらさが子供に定着していなかった。どんなことかはわかっていたが、どんな大変さがあるかを学習しておけば、さらに深い追求が可能だった。

過去の戦争被害の子供たちに自分を投影するだけでなく、現代の戦争被害のある地域の子供に投影して、平和教育を行うという可能性も見えてきた。

自分の情意的な思いを自然と表出する手立てとして、具体的な人物を通して自分の考えを代弁させるという手法がある。それを利用するような教材化の方が、知と情の揺さぶりがさらに図れると思う。

教師のかかわりについて

疎開の意味を子供の立場からと国(軍)の立場から考えさせる展開も考えられる。為政者の立場を入れることで、疎開の歴史的な意味をさらに明確に考えることができたといえる。